
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第25号 2018年3月

宮澤賢治が書いた生活誌

— 『グスコブドリの伝記』に描かれた生業と生活の姿 —

A Life Magazine Written by Kenji Miyazawa

— Some Aspects of the Daily Labor and Lives Depicted in “Biography of Gusuko Budori” —

守谷 英一 | MORIYA Eiichi

宮澤賢治が書いた生活誌

—『グスコブドリの伝記』に描かれた生業と生活の姿—

A Life Magazine Written by Kenji Miyazawa

— Some Aspects of the Daily Labor and Lives Depicted in “Biography of Gusuko Budori”—

守谷 英一 | MORIYA Eiichi

The purpose of this paper is to demonstrate that Kenji Miyazawa’s fairy tale, “Biography of GusukoBudori,” is imaginarily constructed from the actual lives of people in Iwate Prefecture.

The analysis of this paper is conducted in the following steps: first, the fictional places such as “forests,” “fields,” and “cities” in Miyazawa’s fairy tale are considered not just as geographical names but as abstract embodiments of where people actually lived. Second, the various techniques of subsistence that are extracted from his depiction of people’s lives in the tale are examined with reference to the actual statistical data and historical documents on agricultural techniques. As a result, it turns out that the world described in his work fairly accurately reflects the contemporary real-life practices in Iwate Prefecture from the late Meiji period to the early Showa period, during which Miyazawa lived. In other words, “Biography of GusukoBudori” is a “life record focusing on people’s daily labor,” which is described as a group of people living in the era when this tale was written.

Moreover, Budori, a technologist, is given the dual role in this tale, both a person responsible for supporting agricultural practices in “forests” and “fields” and a person responsible for the stability of people’s daily lives.

These considerations suggest that it was Miyazawa’s honest attempt to depict imageries of integrated “agriculture” comprised of both science technology and labor techniques. I conclude that this is what Miyazawa intends to offer in “Biography of GuskoBudori.”

Keywords:

「グスコブドリの伝記」、宮澤賢治、生業、生活誌

“Biography of GusukoBudori”, Kenji Miyazawa, subsistence, life magazine

1. はじめに

本稿の目的は、宮澤賢治の童話作品「グスコブドリの伝記」が、岩手県の農山村に現実に生きていた人たちの生業の有様と生活の諸問題を描いた「生活誌」という側面を持つということを明らかにすることである。

「グスコブドリの伝記」は、イーハトーブの大きな森の中に生まれた主人公が、冷害による飢饉のために、父母を失い、たった一人の妹ともはぐれてしまうが、さまざまな苦勞をしながら火山局の技師となり、最後は冷害を回避するために身を犠牲にするという話であり、作者宮澤賢治が36歳の時、昭和7(1932)年に発表されたものである¹。

この作品について小説家の黒井千次は、「宮沢賢治の遺したもののうち、ほくが読んだ中でもっとも強く惹かれた(そして今もなお)は「グスコブドリの伝記」である」としている(黒井,1977: 34)。

同じ東北出身の劇作家、井上ひさしは、父を乗り越えたいと願いながら、現実的にはあらゆる面で父にかなわなかった賢治が、信仰の面で父を乗り越えようとして選んだのが日蓮宗だったとし、賢治の到達した日蓮思想は自殺多生、自己犠牲によってまわりが生き延びることだと述べた後、「『グスコブドリの伝記』は、賢治の思想が実によくあらわれています。大勢の人たちが安心して生きていけるために、自分は命を捨てていく。おれの方が年をとっているから、おれが行くよと技師が言います。技師はお父さんで、若いグスコブドリがそれを押し切って自分が犠牲になる。現実はともあれ、思想ではお父さんを完全に乗り越えていったのです。『グスコブドリの伝記』が最後の作品であったことは、非常に象徴的な気がします。」と述べている(井上,1995: 194-195)。

作品の評価をするのが本稿の目的ではないが、黒井や井上のいうように、「グスコブドリの伝記」は、賢治の童話作品として代表的なものの一つといってよいと考える。また、作者宮澤賢治は、詩人や文学者としてよく知られているが、盛岡高等農林専門学校を卒業し、稗貫農学校(のちに花巻農学校、現花巻農業高等学校)で教鞭を執り、教師をやめて後も肥料設計をしたり、石灰工場の技師をしたりという農業技術者としての側面を同時に持っていた。そのようなことから、この作品は賢治の「自伝的作品」と位置づけられることもあるようである²。

この作品には、例えば木樵りとかてぐす飼いやオリザの

栽培など、さまざまな生業が描かれている。それは、抽象的に描かれているが、昭和初期までの実際の生業の技術と対比しながら、社会・文化的な文脈の中で読み解くと、賢治が現実に見聞きし体験したのによって裏打ちされた人々の生活の姿が具体的に浮かび上がってくる。そしてそのためこの作品は、虚構の「伝記」でありながら、一方で賢治が見聞きした農山村の人々の生活の有様と抱えていた課題が記述された「生活誌」という側面を持った作品になっていると考えられるのである。

大島丈志は、賢治が童話作家・詩人・宗教者・農学校教師・農業技術者・採石工場技師という多様な履歴を持ち、活動していたこと、とりわけその中でも農業活動に注目して、賢治の作品を論じている。このような大島の試みは、作者宮澤賢治は農業に関わったというイメージは溢れているものの、作品と農業との関係、賢治の行った農業実践の内実やそれが同時代の中でどう位置づけるかなど、賢治作品と農業との関係を広く捉える論考は少ないという問題意識に支えられている(大島, 2013: 6-9)。

大島の問題意識は共感できるものである。したがって、大島の論考を参考にしながらも、本稿では大島がとりあげた農業よりも広い視点の「生業」という視点で作品の読み直しを試みることにする。

なお、賢治は、原稿の段階から発表以降も作品に手を入れることが頻繁であり、他の作品と同様に本文には多くの異稿が存在する。本稿では本文を引用する場合、筑摩文庫版の『宮沢賢治全集』8に収録されているもの(発表形=初出形)を用い、括弧書きで引用ページを示した。

2. 場所の問題

まず、「場所の問題」に言及しておかなければならない。

この作品で描かれている場所は、イーハトーブの「森」「野原」「市」という場所である。具体的な名称としては「イーハトーブの市」や「サンムトりの市」「サンムトリ火山」というような表記があるが、作品を読んでも、具体的にそれぞれが現実のどこであるのかということをは定することは難しい。むしろそのような具体的な場所をは定することを拒んでいるのが文学作品としてのこの作品の性格であるといえよう。

「イーハトーブ」とは「イーハトヴ」なども標記され³、賢治の文学の研究者である原子朗の編んだ『宮澤賢治賢治語彙辞典』には、「重要な賢治の造語地名。『注文の多い料理店』の「広告ちらし」に、「イーハトヴは一つの地名である」「ドリームランドとしての日本陸中国岩手県である」と賢治は明記している。」と説明されている(原,1989:58)。また、地理学者の青山宏夫は「一方は理想としてのイーハトーブであり、他方は現実としての岩手県である」として、「イーハトーブ」は理想の地と現実の岩手県という2つの意味を持つ二重の風景であると指摘している。また、青山は、「実際の生活に密着した「場所のイメージ」を考えるという立場から、後者を扱う作品を扱う」ということで、「グスコープドリの伝記」を採り上げ、「『グスコープドリの伝記』の舞台設定は実際に宮澤賢治が直面したのと同じような環境であることが要求される。少なくとも宮澤賢治が「現実」と考えたものでなければならない」といっている(青山,1985:38)。従って、文学的にはこの作品の地名は「ドリームランド」、つまりどこにもない土地でありながら、それは現実の岩手県が基盤となっている土地であると読むことが可能であろう。

さらに青山は、イーハトヴという世界が非農業地帯としての「森」、農業地帯の「野原」、科学の世界としての「市」という3つの構成要素で描かれていることを指摘している(青山,1985:41)。

筆者は、この「森」「野原」「市」とは、生業の行われている場所の区分を表した名称であると考えた。その具体的な説明は後で示すが、賢治はそれぞれの場所での生業の姿を意識的に書き分けていると考える。そして、青山の指摘に同意するわけではないが、「森」「野原」「市」は単なる地勢を表した名称ではなく、人々の生きる場を抽象化した名称であり、その相互の関係についても描かれていると考える。だから、そこに描かれた人々の生きる姿を見る上では、「森」「野原」「市」については、もう少し具体的な場所設定をしてもよいと考えられる。

先に述べたように「イーハトーブ」が「ドリームランドとしての日本陸中国岩手県である」と規定されていることから、「ドリームランド」ということを意識しながらも、具体的には「森」は「北上山地」や「岩手山周辺の奥羽山脈」、「野原」は「北上盆地」、「市」は「盛岡市」や「花巻市」などを想定して論を進めてよいと考える⁴。

3. 「森」の生活

(1) 北上山地

作品中の「森」は北上山地が想定される。まず、北上山地という場所について理解しておきたい。

北上山地の地勢について、地形学や地質学を専門とする吉永秀一郎は、北上山地を北は青森県八戸から、南は宮城県牡鹿半島まで、約300km、東西約80kmの広がりをもったものであり、「1.高さの揃った山並みとそれから抜き出た孤立峰／2.北上低湿地に接して広がる高原上の地形／3.そこにおける起伏の小さい丸みを帯びた尾根、関係者の斜面と幅広い谷／4.さらに太平洋側で出現する幅広い河谷と、それを構成する急傾斜の斜面／これらは北上山地の地形景観の特徴なのである」と説明する。さらに、盛岡周辺の北上山地中部では、海拔一三〇〇～九〇〇メートルと海拔六〇〇～五〇〇メートルに高低二段の標高揃った地形が広がっているという(吉永,2005:2-6)。

森林や林業の研究者である桜井尚武は、北上山地の属する東北地方の冷温帯林を代表するのがブナ林であるのに対し、「北上山地の中北部ではミズナラ林が一般的で、標高の低い地域ではそれがコナラ林に代わる。近年では伐採により稀になったものの、以前はよく発達したミズナラ林が、小本川(おもとがわ)水系や安家川(あっかがわ)水系に広く見られたと説明している(桜井,2005:106-107)。さらに、このような特徴的な林相は、林を伐採し牧野にし、地力が衰えると樹林地に戻すということが約60年間隔で繰り返し行われたためであろうと推定している(桜井,2005:108-109)。

耕地については、『岩手県林業史』の「付論 岩手県における農業・農村の推移」によると、明治42(1909)年には耕地率10%以下の町村は全市町村中の40%強、96市町村に及び、うち48町村は耕地率5%にも満たないという。それらのことから、岩手県が全体としても耕地率9.1%の山村地帯であり、その分布が明瞭に北上山地、奥羽山脈にそって全県にわたっているという(岩手県,1982:118)。

ブドリが生まれたのはこのような山地にある「山村」ということになろう。

(2) ブドリの家の生業

ブドリの一家は「森」に住み、ブドリの父グスコーナドリは木樵りであり、母は家の前の小さな畑で麦を作っていた。この項では、ブドリの家の生業の姿を「森」に比定される北上山地の生業と対比してみよう。

現実の北上山地の生業の姿を見るために、北上山地の北東部に位置する岩手県下閉伊郡岩泉町安家地区をフィールドとして、民俗生態史的研究を行ってきた岡恵介の『視えざる森の暮らし 北上山地・村の民俗生態史』の記載事項を見てみよう。

岡は、文献や統計資料に加え、20年にわたる聞き取りと観察の資料を基にして、幕末期から現在までの概ね150年間の安家地区における生業や暮らしの中での環境利用の実態の復元を試みた(岡,2008:13-14)。その結果から、具体的な生業を抜き出して整理すると概ね次のようになる(岡,2008: 71-115)。

- 1 養蚕
- 2 狩猟
- 3 たたら製鉄
- 4 薪や木炭などの燃料生産
- 5 牛飼養
- 6 枕木などの用材生産
- 7 畑作

この中で、賢治の生きた時代に相当する明治末期から昭和初めまでに該当するものをあげる。安家地区の場合、幾つかの生業を組み合わせていたが、この時代の主要な組み合わせ要素は「養蚕」、「薪や木炭などの燃料生産」、「牛飼養」、「枕木などの用材生産」、「畑作」ということになる(岡,2008: 121-138)。

このうち、「薪や木炭などの燃料生産」と「枕木などの用材生産」は「林業」つまりブドリの父グスコーナドリの仕事である「木樵り」にまとめることができる。そうすると、ブドリの父は薪の生産と用材の生産をしていたと考えられる。

ミズナラやコナラの林である北上山地においては、薪炭の原料木は多くあった。とりわけ東北本線の開通以降は、産地の集荷業者が買い集めて消費地の問屋に渡すという形で流通した。明治29(1896)年の三陸大津波、明治35(1902)年、明治38(1905)年、明治43(1910)年の凶作時にも、災害対策の勸業製炭や薪の生産が奨励されたこともあり、これを機会に生産量が増加したという(岩手

県,1982: 1048)。

作品の中では、ブドリの父親の仕事の様子は詳しく描かれていない。グスコーナドリは「名高い木樵りで、どんな大きな木でも、まるで赤ん坊を寝かしつけるやうに訳なく伐つてしまふ人でした(230ページ)」と説明されている。また、「ブドリのお父さんもお母さんも、たびたび薪を野原の方へ持つて行つたり、冬になってからは何べんも大きな樹をそりで運んだりした(231ページ)」という記述がある。そこから考えると、薪と用材を生産し、それを「野原」へ運んで現金収入を得るのがブドリの父親の生業ということになる。

畑作については、ブドリの母が家の前の小さな畑に麦を蒔いている。岡恵介によると、安家地区は、総面積が21,187haであるが、そのうち90%が林野であり、耕地は総面積の1.2%しかなく、多くは畑であるという(岡,2008: 23-26)。

その畑は、大正初期の旧安家村全体では普通の畑が210町歩(210ha)に対し、焼畑は120町歩(120ha)となっており(岡,2008:2008: 121)、普通の畑(常畑)と焼畑の比率は概ね2対1である。

常畑では「二年三毛作」という方式で経営され、1年目の春にヒエまたはアワやキビを播き、秋に収穫した後、すぐにオオムギかコムギを栽培、2年目の春には畝の間にダイズまたはアズキを播いて初夏に麦類を収穫し、秋に豆類を収穫する、2年間で3品目の作物を栽培する方法である。また、焼畑ではアワ、ヒエ、ダイズ、アズキ、ソバなどが栽培された(岡,2008: 133)。

作品にはこのような詳細な記述は見られない。ただ、作品では現実と同様に「麦」が栽培されているということは注目しておきたい。

以上が記述されたブドリの家の生業である。安家地区と賢治の居住していた花巻周辺の山村では違いがあるのかも知れないが、安家地区と対比するとこの作品のブドリの家の生活は、現実の生活を部分的ではあるが反映したものであるといえよう。

(3) てぐす飼い

ブドリの家の生業として描かれなかった「森」の現実の生業の1つは「てぐす飼い」の生業として登場する。

父母が行方不明になり、妹のネリが人さらいに連れ去られ、1人になったブドリが森で出会ったのはてぐす飼いの男

であった。ブドリは足かけ2年、てぐす飼いを手伝うこととなる。物語に記述されているてぐす飼いの工程を整理してみよう(234ページ~240ページ)。

(てぐすの飼育)

- 1 芽を出す前の栗(クリ)の木にはしごをかけて、丸めた網を投げて網をかける。
- 2 全部の木に網掛けが済むと、栗(アワ)のようなものがいっぱいついた板きれを1本に5、6枚ずつ吊す。
- 3 そのうちに木は芽を出し、真っ青になる。木に吊した板きれからたくさんの小さな青じろい虫が、糸をつたわって列になって枝へ這い上がって行く。
- 4 この間、薪をとってきて工場のまわりに積んで行く。
- 5 栗が花を付けるころ、虫は栗の花のような色と形になる。
- 6 森じゅうの栗の葉は虫に食い尽くされる。
- 7 それからまもなく虫は、おおきな黄色い繭を、網の目ごとにかける。

(製糸)

- 1 繭を籠に集める
- 2 集めた繭を鍋でぐらぐら煮て、手で車を回して糸をとる。
- 3 できあがった糸を荷馬車に積んで町へ帰る。

「てぐす(テグス)」とは一般的に漁網、釣り糸や外科手術用縫合糸として使われる糸をいう。糸をとるために飼育されるのは、「テグスサン(*Saturniapyretorum*)」また、「フウサン(楓蚕)」または「テグスガ」とも呼ばれる蛾で、一般的に「野蚕(やさん)」と呼ばれる絹糸を生成する蛾の一種である(松香他,1998: 40-41)。

けれども、これらの蛾から糸をとる方法は、この作品に描かれている方法と異なっている。いわゆる「テグス糸」は、テグスサンの幼虫が成熟したときに捕獲し、水に漬けて自然死させたものから絹糸腺を取り出し、それを酢に浸して引き延ばし乾燥させる方法でつくる(松香他,1998: 40)。繭を採取し、それから糸をとるのではない。従って、「てぐす飼いの飼っていたのは「テグスサン」ではないことになる。

他に絹糸をつくる虫に「テンサン」がある。「テンサン(*Antheracayamamai*)」は「ヤママユガ」あるいは「ヤママユ」ともいわれる蛾であり、日本全域、朝鮮半島、中国東北部に分布している。近世から飼育の記録があり、平成8(1996)年には23都道府県81市町村で約23万粒(約1.4t)のテンサン繭が生産されたという(松香他,1998: 36)。

飼育方法は「山飼い」と「桶飼い」という方法が一般的であり、前者の「山飼い」という方法は、

- 1 クヌギ(樺)などを植えた樹園を作って、その樹園にネットを張り巡らせる。
- 2 その1株毎にテンサンの卵を30粒ほど糊で和紙に付着したものを付ける。
- 3 卵は4、5日して孵り、葉を食べて育つ。
- 4 孵化から50日から60日ほどで脱皮を4回繰り返す、5齢で熟蚕になる。
- 5 熟蚕は、6月頃葉を2、3枚綴り合わせてそこで繭を作る。
- 6 繭を集め、不良の繭を取り除く。
- 7 繭を煮て糸口を探し、5から7粒の繭の糸を撚り合わせ糸をとる。

という飼育法である(日本工芸会近畿支部,2001: 74-80)。

この飼育方法は「てぐす飼い」の「てぐす」の飼育方法とよく似ている。また、テンサンの飼育に使う樹種はクヌギ、コナラ、カシワ、シラカシなどである(松香他,1998: 36)が、実際にテンサンを飼育している山形県白鷹町深山地区で話を聞くと、テンサンはクリの葉もよく食べるということである⁵。そこから考えると、「グスコブドリの伝記」に描かれている「てぐすの飼育」は「テンサンの飼育」の方が近いと考えられる。

また、テンサンに近い種に「サクサン(*Antheracapernyi*)」がいて、明治11(1878)年に中国から導入され、長野県有明地方で昭和初期まで大規模に飼育されたことがあったという(松香他,1998: 36)。『原色日本蛾類図鑑』によると、幼虫が食べる樹種はクヌギ・カシワ・コナラ・クリ・ブナノキとなっている(江崎他,1958: 225)。可能性としては、「サクサン」ということも考えられる。

いずれにしても、作品で描かれている「てぐすの飼育」は、「幼虫を殺して糸をとる」という「テグス」ではなく、繭から絹糸を製糸する「テンサン」あるいは「サクサン」の飼育と考えられる。

もうひとつ注目すべき点がある。この作品には火山の噴火による「てぐす」飼育の失敗が描かれている(239ページ~240)。近世からの飼育地である長野県有明地方(現在は安曇野市)では、明治41(1908)年から明治45(1912)年にかけての焼岳の噴火による降灰のため、テンサン飼育は大きな打撃を受けたという(松香他,1998: 51-52)。作品

に描かれている「てぐす飼い」の失敗は、作者宮沢賢治がこの事実を知っていて、有明地方の状況を踏まえて描かれていると推測される。

以上のことから「てぐす」という表現は、この作品の「森」や「野原」などと同様な象徴的意味のことばであり、作品では「テンサン、あるいはサクサンの飼育」の技術を描いているが、そこには東北地方で広く行われていた家蚕（かさん）の飼育、つまり養蚕の姿が投影されている推測してもよいのではないかと考える。

とりわけ岩手県の場合、近世まで養蚕は山林に生える「山桑」を利用して行うことが当たり前のこととされ、桑園の発達が遅れた。山桑の利用は全県では昭和27(1952)年ごろでも、総面積の18%もあり、二戸地方では51%にもなっていた(岩手県,1979: 1171-1172)。岩手県の場合、養蚕と「森」の結びつきは強いといえよう。

他の地方では「養蚕」は平地(「野原」)の生業と考えられるが、先に提示した岡の整理のように、岩手県の場合は山地(「森」)の生業に位置づけても無理はないといえよう。岡のいう「森」の生業の「養蚕」は、この作品では「てぐす飼育」ということで提示されていると考えられる。

(4) 牛飼養

残りの「牛飼養」であるが、作品の中でそれにあたるのは、終盤に描かれる成長したネリの嫁ぎ先である「牧場」の生業ということになる。

岩手県の牛については「南部牛」がよく知られており、時代は特定できないが「北上山中の遠野の牛方は、鉄を牛につけて信濃川流域まで運送していた」という記述もある(和歌森,1976: 271-272)。この「南部牛」は、近代以前は輸送などに用いられる「役牛」であるが、「日本短角種」と呼ばれる牛であり、主として畑作地帯の牧野を利用して飼育されていた(岩手県,1979: 1031)。

また、明治4(1871)年に飼育地帯の中心地である岩泉に民部省勧業寮からアメリカ産ショートホーン種雄牛が2頭貸与され、南部牛の品種改良が始まった。その後、個人的には明治24(1891)年には気仙郡吉浜村の水上助三郎がカナダからショートホーン種雄牛1頭、雌牛4頭を購入するなどして、南部牛の品種改良が進んで行く。しかし、本格的に改良に強い関心が持たれるようになったのは昭和10(1935)年以降である。背景としては、全国肉畜博覧会で、

改良和種と比較して南部牛系の短角系牛の資質や価格が劣っているとの評価を受けたことや有畜農業が奨励されていたことなどと考えられる(岩手県,1979: 1031)。以上は、役肉牛の飼育ということになる。統計的に見てみると、昭和5(1930)年には飼育戸数が6030戸、飼育頭数が13,425頭となっている(岩手県,1979: 1035)。

牛乳の生産や利用を目的とした酪農については、岩手県の場合のはっきりした始まりを特定することはできないが、明治20(1887)年春に、岩泉町で練乳製造が始められたということが伝わっている。また、搾乳業としては盛岡市などの都市部で開始され、明治20年頃には東京からホルスタインを移入して繁殖搾乳し、病人や子どもを対象に販売し、1日あたり約2斗(36ℓ)の販売をしていたものが2人いたということが伝えられている。その後は明治24(1891)年に雫石村、西山村、滝沢村にまたがる小岩井農場が、井上勝、小野義真、岩崎弥之助によって開設され、乳牛の品詞改良などに貢献した。また、昭和4(1929)年に岩泉町に明治乳業の工場が設立されるようになって、酪農は安定する。県の古い記録によると、昭和元(1926)年に搾乳牛飼育戸数が129戸、飼育頭数が373頭であったものが、昭和5(1930)年には、260戸、627頭まで増加している(岩手県,1979: 1051-1053)。この統計によると、昭和5年でも1戸あたり3頭未満であり、先に示した役肉牛を同時に飼育している場合でも4~5頭平均となる。

岡恵介は、安家地区の生業史について、明治41(1908)年から昭和9(1934)年までを、「換金型生計活動の諸手段をすべておさえた名子との地頭名子制度を核にしながらも、小作や牛小作によってさらに広く村内の経済を掌握した社会システム、ダンナシステム」の確立期と位置づけている。そして、その核になったのが牛飼養という生業であったと述べている。(岡,2008: 123-132)。その時期と少しずれるが昭和13(1938)年の安家地区の牛の飼育戸数は約130戸、飼育頭数は約750頭である⁶。平均すると、5~6頭ということになり、県内の平均よりやや多い程度と考えられる。

ここで岡は「牛小作」という聞き慣れないことばを用いているが、これは、畑の場合の畑を借りて耕作し、小作料を払うのと同様に、牛を借りて飼育するものである。具体的には、牛を貸し付けて借主が飼育繁殖させ、子牛の売り上げを折半する「タテワケ」というものが一般的であったが、借主が借りた牛を育成しその売り上げを分ける「リワケ」、冬

期間のみ飼育をうけおう「フユダテ」、があった(岡,2008: 131)。

以上のような統計や岡の調査から考えると、当時の牧畜は「牧場」というよりも「牛飼養」という方が適当な小規模のもので、この作品の「牧場」は現実離れたもののように考えられる。この作品で描かれたネリの暮らす「小さな牧場」は、当時の現実を反映したものではなく、現実に存在した小岩井農場⁷のような牧場をイメージして、その規模を小さくして表現したものであり、理想化された酪農の姿を描いていると考えられる。

(5) 食べ物から見た「森」の生活

飢饉でない平時の場合、母親の耕す畑からの収穫でブドリの一家の食べ物はまかなえたのであろうか。岡は「聞き取りによれば、昭和の初め頃の平均的な耕地面積の自作農家では、畑作で自給できる食糧は必要量の半分だった。これは一九三八(昭和十三)年の安家の食料自給率は五十パーセント(積雪地方農村経済調査所、一九三八)であったという報告とも合致する」と言っている(岡,2005: 134)。ブドリの家の場合も母親の耕す畑の食料生産では、平時であっても当然不足していたであろうことは推測できる。不足分の食料は、先に述べた父親のナドリの木樵りとしての稼ぎの収入で、野原や町から買い求めているということになる。

さらに岡は、安家の場合、畑作で栽培されるものの他、周囲の自然環境から食用可能な野生植物を採取し、必要に応じて加工処理して日常食として利用し、あるいは救荒食として保存していたという。それが、北上山地山村における生存のための食料確保技術であったという(岡,2005: 134)。

特に、「欠配」時代(第二次世界大戦後の食料難の時代)を具体的に調査した結果、貯蔵性のあるものとして利用された野生植物は、「カシワ、クズ、コナラ、トチ、ミズナラ、ワラビで、このうちカシワ、コナラ、ミズナラはそのドングリである堅果を、クズとワラビは根茎を利用した。またクリは「欠配」時だけでなく、現在でも拾って食べているが、これも「欠配」時にはかなり利用された貯蔵性のある堅果類である」と説明している[(岡,2005: 162)。さらに、コナラ、ミズナラ、カシワの堅果である「シタミ」とクリ、そしてクズやワラビのデンプンは、藩政時代から用いられた、かなり持続性の高い

危機に対応する技術だったともいっている(岡,2005: 163)。

「グスコブドリの伝記」の中にも、飢饉の時に「こならの実や、葛やわらびの根や、木の柔らかな皮やいろんなものをたべて、その冬をすごしました(232ページ)」という記述や、母親が父親を探しに行くために出かけるときに、ブドリとネリに残した食料として、「お母さんの云つた粉のことを思ひ出して戸棚を開けて見ますと、なかには、袋に入れたそば粉やこならの実がまだたくさん入ってみました(233ページ)」という記載がある。また、クリに関しての記述もあることに気がつく。「そしてたうたう秋になりましたが、やつぱり栗の木は青いからのいがばかりでした(231ページ)」というのがその部分であるが、ブドリの一家にとってもクリは重要な食料であり、日常的な貯蔵性の高い食料と考え、「栗の木は青いのがばかり」という表現は、凶作とそれに引き続く飢饉の恐怖をいっそう際立たせる表現であるといえよう。

「グスコブドリの伝記」では、野生植物の利用は「救荒食」としての記載であるが、さらに、岡はこのような森の恵みについて、「北上山地の山村では、シタミ(ミズナラ、コナラ、カシワの実)が毎年冬から春にかけて食用に供されることが多く、その時期の基本食の一つであって健康を損なうようなものではなかった。(中略)シタミが飢饉や食料が足りないときに仕方なく食べる救荒食というだけの存在ではなかったということは強調しておきたい」として、北上山地の食文化の構成要素としてのシタミの重要性を述べ、「北上山地のブドリたちは、毎年のように冬から春にかけてコナラの実を食べ、元気に食を楽しみながら生きていたであろうと想像される」とまとめている(岡,2005: 134)。

作品には多くは記述されていないが、筆者はブドリの家の姿は、岡が記している北上山地の木樵りと畑作で生業を立てている人たちの生活の姿とはほぼ同様であろうと考える。

4. 「野原」の生活

(1) オリザの栽培

*Oryza sativa*は稲の学名である(原,1989: 56)。この作品で稲と書かず、「オリザ」という表記にしているのは、先の

「てぐす」と同様な考えからであろう。従って、現実的な稲作の技術を踏まえながらも、「イーハトーブ」のオリザという作物の栽培を描いていると考えられる。

「オリザ栽培」は「野原」の生業である。野原には沼ばたけがあって、赤鬚の男たちが「オリザ」を作っている。この作品に描かれているのは主に栽培の初期段階の作業であるが、それを整理すると次のようになる(240ページ～247ページ)。

- 1 沼ばたけにはせいの低い桃色の花と緑色の小さな穂を出す草を植えておく。
- 2 沼ばたけは低い幅のせまい土手で区切っておく。
- 3 春になって花が咲き、草に穂が出る頃、馬を使って沼ばたけを掘り起こしたり、かき回したりしてどろどろにする。
- 4 花や草は沼ばたけに埋めてしまう。
- 5 豆玉や鳥の糞(かえし)というような肥料を沼ばたけに入れる。
- 6 20日ばかりで、沼ばたけがすっかりどろどろになると、あちこちから集まってきた人たちと一緒に緑色の槍のようなオリザの苗を沼ばたけいちめに植える。
- 7 10日ばかりで自分の沼ばたけを済ませると、今まで手伝ってもらった家に働きにでかける。
- 8 それが終わると、自分の沼ばたけの草取りをする。
- 9 8月の半ばになると、オリザの株はそろって穂を出し、白い花が咲く。

この栽培工程を見ると、「田起こし(たおこし)」、「代掻き(しろかき)」、「田植え(たうえ)」の手順が中心になっていることがわかる。

この栽培工程の5までが「田起こし」の段階であり、赤鬚の男は馬を使って20日ばかりかかっている。耕起される前の「沼ばたけ」、つまり水田には「せいの低い桃色の花」と「緑色の小さな穂を出す草」が栽培されていることに注目したい。

これらの植物は、「花はみんな埋めてしまった(241ページ)」や「桃いろのカード(花の植わっている沼ばたけ 筆者註)も緑のカード(緑色の草の植わっている沼ばたけ 筆者註)もだんだん潰されて、泥沼に変わるのです(242ページ)」と記述されているように、水田にすき入れられるのである。これを「緑肥」という。他には、近世以来、山野から刈り取った草木を生のまますき込むなどをしている。これを「刈敷(かりしき、かつしき、かしき等)」と呼んでいる(古島、

1975: 337-338)。

「せいの低い桃色の花」とはおそらくレンゲ(「紫雲英」、「ゲンゲ」)であろう。国語事典には「れんげそう(蓮華草)豆科の二年生作物。中国原産。東アジアに分布。わが国では緑肥・飼料作物として古くから用いられたらしい。水田の裏作とし、明治末期から北海道を除いて全国に広がったが、その後減少。レンゲ。ゲンゲ。漢名、紫雲英」と記載されている[新村,1955: 2545)。

肥料の三要素と呼ばれるものがある。「窒素」、「カリウム」、「リン」がそれであるという。レンゲ栽培は空中窒素を肥料化する重要な役目を担っているという(藤原他,1998: 117,174)。

岩手県の場合、岩手県農業試験場が大正3(1914)年から水田裏作としてレンゲの栽培を奨励した。「岩手紫雲英」という品種の選抜、「作り方・施し方」の刊行、試作地・指導地の設置によって推進したのである(岩手県,1979: 564)。そして、昭和初期の農家経済の逼迫に伴い、急激に自給肥料としてのレンゲの増産が行われている(岩手県,1979: 846)。「せいの低い桃色の花」と「緑色の小さな穂を出す草」は緑肥であるが、それは自給肥料として栽培されていたものであると考えられる。

レンゲなどの緑肥の他に、赤鬚の男は「豆玉」や「鶏の糞」を肥料としてかなり多く入れている(241ページ)。「豆玉」は大豆粕であって、大豆から油をしぼったあとのかすである(原,1989: 659)。「鶏の糞」はいわゆる「鶏糞(けいふん)」と推定できる。鶏糞は「窒素」、「カリウム」、「リン」をバランスよく含んでいる肥料であるが、大豆粕は「窒素」の含有量の多い肥料である(藤原他,1998: 227)。

これらの肥料は農家が自分で生産することができない。それらの肥料はお金を払って購入することとなる。そのようなことで「金肥(きんぴ)」とも呼ばれていたものである。赤鬚の男は、自給の緑肥に加え、金肥としても窒素肥料を多く使っていることがわかるが、そのために大きな問題を抱えることとなる。それについては、後ほど詳述したい。

次の6及び7の段階は「田植え」である。この作品で描かれているような人手による田植えには多くの働き手が必要となる。「あちこちから集まってきた人たちと一緒に」や「今まで手伝ってもらった家に働きにでかける」ということ⁸が描かれていること(242ページ)に注意したい。

赤鬚の男は、自分の「沼ばたけ」をみんなと10日余りで済ませた後、手伝いに出かけるが、それは、田植えの際に賃

金を支払わないで労働の相互交換が行われている様子であると考えられる。このような労働の相互交換を一般的に「ゆい」と呼んでいる、

古島敏雄は平安末期にはすでに、田植えに際して「ゆひ(ゆい)」が行われていたことを示している(古島,1975:164)。調査をしていると、さまざまな場面で田植えや「屋根葺き」の「ゆい」が存在していたことを聞くことができる。この作品にもこのような東北にもあった慣例が反映されていると考えられる。

(2) オリザの病気

肥料をたっぷり施したはずの赤鬚の男のオリザに病気が発生する。「どの葉にも、いままで見たことのない赤い点々がついておました」と記されている(243ページ)。

この病気は、「いもち病」であろうと考える。「いもち病」は、イネの病気で最も被害が大きく、全生育期間に、また全国いたるところに発生する。また、「いもち病」は葉、穂首、節、もみなどに発生し、葉でははじめ「暗灰緑色」の斑点を生じ、のち病斑の内側は「灰白色」、周囲は「赤かつ色」、病斑の外周は「黄色」となる。原因は「イネいもち病菌(稲熱病菌、*Pyriculariaoryzae*)」であるという(河田,1975:146)。断定はできないが、賢治は農民を苦しめた「いもち病」を頭に置いていると推測する⁹。

さて、ここで、赤鬚の男のオリザにだけ病気が発生していることに注意したい。今年こそ天候がよいから3年分の収穫をしようとして、肥料をたくさん入れようとする赤鬚の男に、1人の老人が「やめろつて云つたらやめるもんだ。そんなに肥料(こやし)うんと入れて、藁はとれるつたつて、実はひとつぶもとれるもんでない。」と諫める場面がある(241ページ)。赤鬚の男がたっぷり施したレンゲなどの肥料が米の増収に繋がらず、「藁」ばかり獲れる、つまり稲の生育はよいが稔りにならないということである。

さきに、赤鬚の男は窒素肥料を多く使っていることを示した。窒素肥料は生育に関わる。不足すれば生育不良になるが組織は一般に強健となる。一方、過剰になると生育は全体に旺盛となるが作物は軟弱となる。そして、病虫害の被害は受けやすく、熟期は一般に遅れるという(藤原他,1998:227)。

オリザが病気になる前、草取りの時のオリザの様子は「ブドリの主人の苗は大きくなつてまるで黒いくらゐなのに、とな

りの沼ばたけはぼんやりしたうすい緑いろでしたから、遠くから見ても、二人の沼ばたけははつきり境まで見わかりました」と記されている(243ページ)。これはたっぷり施した窒素肥料の効果といえよう。しかし、それが裏目に出るのが「オリザの病気」である。赤鬚の男のオリザが病気になったのは、窒素の過剰によると考えられる¹⁰。他の人のオリザは窒素過剰にはなっていなかったから、「いもち病」に対してある程度の抵抗力があったのであろう。「藁はとれるつたつて、実はひとつぶもとれるもんでない」ということばは、むやみに肥料を入れることに対する警告のことばといえよう。

さて、病気の出たオリザに赤鬚の男は石油を散布する。その当時の石油の病虫害駆除の効果については、明治24(1891)年に岡山県内務部が発行した『農家必要 病虫害駆防要覧』¹¹では、ウシカの駆除のところに「石炭油(石油)、芥子油、鯨油、いずれにても一反歩につき三、四合の割合をもってこれを水面上に滴下し、一人は後より竹竿をもって徐々にこれを水上に掃い(はらい)落とすべし」と記されている[岡山県内務部,1891:203]。一方、いもち病については窒素肥料の節約をするようにという注意はあるものの、石油が防除の効果を持つことは記載されていない(岡山県内務部,1891:209)。従って、赤鬚の男の石油散布は病気に対して何の効果もなかったことは作品に記述されているとおりである。

次の年に病気が発生したときには、主人に言われてさまざまな本を読んで勉強していたブドリが「木の灰」と「食塩」を使って食い止めている(247ページ)。実際のいもち病対策は、当初は農薬を使わないで土壌改良や除草、無病苗の使用などの耕種的手段しか獲られていなかったが、ようやく昭和に入ってから世界に先んじて石灰と硫酸銅を用いた「石灰ボルドー液」が用いられるようになったという(浅賀他,2003:4)。ブドリの作った薬品について、賢治がどのような本による知識を根拠としたのかは、筆者の管見のかぎりでは述べている論考などは見つからなかった。

(3) ソバの栽培と救荒書

オリザに病気が出た結果、赤鬚の男はその年のオリザの栽培を諦め、オリザを刈り取ってソバを蒔くこととする(245ページ~247ページ)。このように米の収穫が望めないとき、ソバを水田に蒔くことがあったことを内藤正敏が紹介している。内藤によると、青森県で文化から天保年間に記され

た市原篤焉の『篤焉家訓』には、凶作の翌春、種籾が不足しているときには、ソバを蒔け、稗は土質を悪くするから蒔いてはならない、夏になってソバを蒔けばその年は米がとれなくても、翌年には田は元になると記述されているという(内藤,2003: 252-253)。また内藤は、平成10(1998)年に福島県大熊町の旧家で発見された、ソバの実がいっぱい入った俵に言及し、天保の大飢饉を生き抜いた祖先が子孫のために残し、代々受け継がれて来たものであると述べ、ソバも救荒食だったと結論づけている(内藤,2003: 253)。山村ではソバは常の作物であったが、平地ではこのように、近世からソバは米のとれないときの救荒食として位置づけられていたのであり、赤鬚の男もその知恵を持っていたということになる。

東北では、このような病虫害による凶作だけでなく、宿命のように冷害により凶作の年が存在していた。先にこの作品の冒頭部分の冷害による凶作のこととその時の「森」の救荒食について記したが、平地においても「救荒食」は近年まで必須の事であった。

白杉悦雄は、宝暦5(1755)年に著された一関藩の藩医である建部清庵の救荒書『民間備荒録』について、野生植物の中から確実に食べられるものを見分ける知識と、その食べ方に関する知識を記し、その知識を飢饉に際し真っ先に飢餓に直面する民と、直に民に接している下級官吏に教えるサバイバル・マニュアルとしての性格を備えた日本人の手に成る、日本で最初の本格的な救荒書として重要であることを述べている(白杉,2003: 155)。

白杉は、建部が『民間備荒録』を著した背景としては、宝暦5年が飢饉の年であるということがあり、また、建部は本草書や食物本草書および農書の知識に通じていたことがあると述べている(白杉,2003: 154,163)。

類似のものは、山形県の上杉藩でも作られている。『かてもの』と題する書物で、享和2(1802)年に米沢藩奉行の中條至資と荏戸善政の連名¹²で1,575冊版行されて農民や町人に配布されている(高垣,2009: 2009: 18-20)。

また、この『かてもの』は、米沢だけでも大正5(1916)年、昭和9(1934)年、昭和15(1940)年、昭和16(1941)年、昭和28(1953)年、昭和32(1957)年、昭和37(1962)年に活字本や影印本が刊行されている(高垣,2009: 21)。

近、現代に入っても救荒書がこのように繰り返し刊行されているのはなぜであろうか。影印本が刊行されていることか

ら、郷土の文化物として出版されているということも当然に考えられる。一方、昭和16年の活字本の刊行に際し、当時の米沢市長登坂又造は「惟ふに現下我国未曾有の難局に遇ふ物資の節約は真に一億国民の勇猛なる実行を要する時貴重なる本書をさらに検討利用して物心共に国策順応の途を講ぜざるべからず茲に市立米沢図書館に秘蔵せる原版を上梓に附し再び之を頒布す亦意義ありと云ふべく聖君の遺徳愛国恤民に負からざらむ乎」と記している¹³。つまり、食料の危機に際しての実用書という意味づけをしていることになる。

これらの書物に記されているものは、かつては全ての人々の常食であった。その後も貧民層の常食か半常食であったと白杉はいう。また、それが15世紀初頭に『救荒本草』によって「救荒」という有用性を発見されて、はじめて記述された知となったが、発見者の為政者にとっては全くの非・常食であったともいっている。このことは、先に述べた岡の北上山地の食文化の構成要素としてのシタミの重要性と対応するものである。さらに、白杉は、現在、これらの救荒食料・備荒食料は保存食や郷土料理に姿を変えて生き残っていて、その中には縄文時代からの知恵が伝承されているのではないかと想像をしている(白杉,2003: 164)。

軽々に「縄文時代からの知恵」とはいいがたいが、このような知恵は文書に記録されたり世の中の表舞台に登場しなかつたりというだけであって、民間では食料としての有用性の知識が伝承されていたのではないかと考えられ、白杉の指摘は首肯できるものであると考える。また、赤鬚の男が、オリザの病気に際して即座にソバの栽培を決断するというような行動は、このような民間の知識を象徴的に表現しているのではないかと考える。

(4) 副業

かつてオリザを栽培していた赤鬚の男は、作品の終盤では「こんどは毛の長い兎を千疋以上飼つたり、赤い甘藍(かんらん)ばかり畑に作つたり、相変わらずの山師はやつておましたが、暮しはずうつといやうでした(268ページ)」という姿で再登場する。

岩手県における甘藍(キャベツ)の導入は大正初期であった。主な産地は盛岡市周辺や岩手郡であり、畑作物としては大正期から昭和初期には国鉄を利用して東京市場に出荷される代表的な商品作物であった(岩手県,1979:

272)。

赤鬚の男はオリザの栽培はやめてしまったのであろうか。大正期には耕地の60%以上が畑地であったが、昭和初期から水田の比率が増加し、昭和9(1934)年には畑地は54%まで減少している(岩手県,1979: 270)。だから赤鬚の男は、水田とともに畑作を行って甘藍を作り、「副業」として兎を飼っていることによって、以前よりも安定した農業経営を行っているのだらうと考える。

大正2(1913)年に大日本副業奨励会というところが発行した『日本の副業』というものがある¹⁴。その序文は林学博士本田静六という人と文学士村上辰五郎という人が書いているが、本田は世の中の人々が生活に苦しんでいるのは、適当な副業を知らないからであるとし、そこで奨励会は各種副業を調査して知らせ、農工商家の参考にして国の利益と人々の幸福の増進を図ることがこの書物の目的であると述べている(大日本副業奨励会,1913: 1-2)。また、村上は国家の財権樹立は布告の前提であり、強兵の要件であるとし、富国の根本は産業の健全な発達であるとしている。そのために、副業問題を調査するのは時期に合ったことであり、今後の産業発達に貢献するものであると述べている(大日本副業奨励会,1913: 1-2)。つまり、日清、日露の二つの大きな戦争を経て、国力をますます強くすることが社会的に求められており、そのためには国民がこぞって副業にいそしみ、国力を富ませなければならないという趣旨の元に作られた書物ということになる。この書物には藁細工からゴムやセルロイドの製造、さらには製油滓からの石鹼製造法などほとんど考えられるだけの副業が示されている。その中に、ウサギの飼育も「第八章 家兎」として示されている¹⁵。養兎は、このような形で広く奨励されたものと考えられる。

岩手県の養兎については、大正10(1921)年の県統計に飼育戸数が10,299戸、頭数19,303頭という数字が確認できる統計の初めである。その当時の品種は、日露戦争後(1905年以降)に、東京地方で飼育されていた南京種の中に、ニュージーランド・ホワイト種などを交配した「二戸兎(にのへうさぎ)」あるいは「二戸種(にのへしゅ)」といわれた在来種であったと考えられる(岩手県,1979: 1101)。

ニュージーランド・ホワイトは、アメリカで作り出された毛皮用の品種であり、改良の途中で長毛のアンゴラを入れていた。そのため、毛質がやや細長くなり、毛腰が弱いという欠点を持つものである(上原,1964: 78)。二戸兎は、明治43(1910)年にロンドンで開催された毛皮博覧会に二戸産の

兎毛皮が出品され、入賞したといわれている(岩手県,1979: 1101)。

日露戦争当時、軍需として兎の肉や毛皮の需要が増加して、岩手県からも相当出荷したようであるが、その数量などは明らかではない。しかし、昭和8(1933)年2月、陸軍被服廠に兎毛皮70,000枚を集荷販売しているという記録があることから、相当数が飼育されていたと考えられる(岩手県,1979: 1101)。

このように、兎の飼育が盛んになったことの背景として、田口洋美は、明治以降の毛皮が輸出商品になったこと、また、20世紀初頭に各国が軍備を増強し、兵員用の防寒毛皮、軍用毛皮の需要が増大したこと、さらに、国内でも日清、日露の戦争を通して、軍用毛皮の需要が高まっていたということを指摘している。さらに、世界では野生種の良質な毛皮資源が枯渇し、飼育種の毛皮利用へと転換していたが、国内においても、狩猟者を猟友会として組織化して野生毛皮の軍用毛皮の需要を満たすための大がかりな毛皮収集システムを構築して行く。一方、野生毛皮資源の急激な減少に対して危機感を持ち、農家の副業として、兎やイタチなどの飼育を奨励して補助金などを用意する。そして、その結果、大正時代からは養兎組合が各地に作られ、『養兎新聞』というものも発行され、養兎を奨励啓蒙して行く。また、教育の場にも小学校の校庭の片隅で兎が飼育され、子どもたちに親の仕事を理解し、手伝う習慣を身につけさせるということが持ち込まれたと指摘している。つまり、兎の飼育ということは、狩猟がそれまでの日本の姿とは異なって、欧米向けの輸出と軍の需要のために毛皮と羽毛を確保するための市場偏重型の狩猟、軍部主導型、国策としての狩猟に姿を変えていったことと同じ流れの中にあるということを示している(田口,2000: 95-99)。

これらのことを考え合わせると、「グスコブドリの伝記」が描かれた時代の岩手県における養兎も、このような流れの中で盛んに行われたものといえよう。

さて、赤鬚の男が千疋も飼っている「毛の長い兎」というのはアンゴラウサギを思わせる。『岩手県農業史』によると、アンゴラウサギが日本に輸入されたのは明治4(1871)年のことであったが、岩手県でいつから飼育されたかについては、詳しくはわからない。第二次世界大戦時にアンゴラウサギの毛をフェルト化し、航空機の内面保温機に使用するというので、「軍兎」として浮かび上がり、農家も増産に励んだということが記述されている(岩手県,1979: 1100-

1102)。

赤鬚の男の「毛の長い兎」がアンゴラウサギにあたるという確証はない。アンゴラウサギを思わせる「毛の長い兎」は、先の「てぐす」や「オリザ」と同様に象徴的意味のことばであると考えられる。しかし、ここで兎の飼育が提示されていることは、当時の「農家の副業」の実態を反映しているものと考えられる。

5. 「森」と「野原」の「生活誌」

ここまでのことを小括すると、「グスコブドリの伝記」には「森」の人々の生業である「木樵り」「畑作」「てぐす飼育」「牧場」などの生業の様子、そして「野原」の人々の生業である「オリザの栽培」の様子が描かれているといえる。さらに終盤近くでは赤鬚の男の「養兎」も紹介されている。

これらのことを『岩手県林業史』や『岩手県林業史』などの記載事項を基にして、作品が描かれた当時の岩手県の状況と対比してみると、それぞれは当時の「林業」「畑作」「養蚕」「牛飼養」「稲作」や「農家の副業」の実態を反映したものになっていることがわかった。

作品中では特に「養蚕」にあたる「てぐす飼育」と「オリザの栽培」すなわち「稲作」の様子が詳細に描き込まれている。「オリザの栽培」については、稲作は日本の農業の中心であったこと、また作品中でも「みんなでふだんたべるいちばん大切なオリザといふ穀物」と記されている(231ページ)ように重要なものであったからであろう。しかし、「てぐすの飼育」については、岩手県の場合には近隣の福島や山形ほど重要なものではなかった。したがって、これらの選択は現実の重要性ではなく、この二つの生業の姿を詳細に描くことがこの童話にとっては重要であったからであると考えられる。それに関しては次節で詳述したい。

以上のことから、「グスコブドリの伝記」は現実の岩手県の農山村の生活をほぼ正確に把握して記述されていると考えられる。その意味で、「グスコブドリの伝記」は、虚構でありながらも、明治末期から昭和初期にかけての岩手県農山村の「生活誌」でもあるといえよう。

6. 科学技術と生業技術

(1) 火山局の仕事

この作品で「てぐす飼育=養蚕」と「オリザ栽培=稲作」の二つの生業の様子が詳細に描かれているのは、ブドリが火山局に勤めることの伏線となっていると考えられる。赤鬚の男の元から出て、「市」に向かう車中、ブドリの胸は「早くイーハトーブの市に着いて、あの親切な本を書いたクーボーといふ人に会い、できるなら、働きながら勉強して、みんながあんなにつらひ思ひをしなくて済むのが作れるやう、また火山の灰だのひでりだの寒さだのを除く工夫をしたい」という「思い」でいっぱいだった(249ページ)。

ここに示されている「水田稲作の重労働」「火山爆発被害」「旱魃」そして「冷害」が、作品中ではこの二つの生業の大きな障害であった。しかも、「火山爆発被害」を除けば、それは岩手県で暮らす人々を苦しめる現実の問題であったことは先に触れておいたことである。だから、それは、農業技術者としての賢治が現実突き当たっていた問題であったとも推測できる。ブドリの「思い」は賢治の「思い」でもあったといえる。その解決の方法については、現実的な解決ではなく、それこそ童話作品らしい空想的科学的な解決方法が提示されている。

ブドリはイーハトーブの市でクーボー大博士に出会い、その紹介でイーハトーブ火山局での仕事に就く。その火山局の仕事内容が解決方法となっているのである。従って、それは本稿の目的の本筋とはならないのであるが、作者の抱えていた問題意識に関わっていると考えるので、目的に沿った形で論じて行きたい。

火山局の仕事を整理すると、次のようになる(253ページ～264ページ)

- 1 イーハトブ中の火山の監視(観測)。及びそのための器械の設置作業。
- 2 噴火しそうな火山の安全対策としての噴火制御工事。具体例としては、サンムトリ火山の工事(256ページ～261ページ)。
- 3 潮汐発電所の設置¹⁶(262ページ)。
- 4 人工降雨による干ばつの解消。
- 5 窒素肥料(硝酸アムモニア)を空中で作製し、降雨とともに散布すること。

さて、ここに整理した仕事の多くは、これまで述べてきた生業に直接的、間接的に関わっている。つまり、農業技術者としての賢治が、現実突き当たっていた問題を解決する方法として科学技術の可能性を「空想的に」提示していると考えられる。

先ず火山の監視と制御工事は火山局の本務といえよう。次いで人工降雨による干ばつの解消は、天候の制御ということになろう。干ばつについては、本文ではブドリが赤鬚の男のところでもオリザの栽培に従事していた時、ブドリが病気を食い止めた次の年、「植糸付けの頃からさつぱり雨が降らなかつたために、水路は乾いてしまひ、沼にはひびが入つて、秋のとりいれはやつと冬ちゆう食べるくらゐでした」と記されている。また、その次の年も同じようなひでりであったこと、そのためにブドリの主人である赤鬚の男は困窮して行くことが描かれている(247ページ～248ページ)。

岩手県の干害の発生状況は、『岩手県農業史』によると、明治以降から昭和6(1931)年までのものだけでも明治6(1873)、42(1909)年、44(1911)年、大正5(1916)年、13(1924)年、15(1926)年、昭和3(1928)年、4(1929)年と8回を数えている(岩手県,1979: 836)。有名な「雨ニモマケズ」の「ヒド(デ)リノトキハ／オロオロアルキ」¹⁷という語群を思い起こさせる事実であるが、この作品においても、このような灌漑によって苦しめられた現実を反映していると考えられる。従って、ブドリたち火山局は「窒素肥料を降らせませす」というポスターに、「早魃の際には、とにかく作物の枯れなむぐらいの雨は降らせることができますから、いままで水が来なくなつて作付けしなかつた沼ばたけも、今年は心配せずに植糸付けてください」と誇らかに記した(262ページ)のだろうと考える。

さて、「雨ニモマケズ」といえば「サムサノツツハ／オロオロアルキ」を忘れてはならないだろう。この「グスコブドリの伝記」においても、「サムサノツツ」つまり冷害は大きな位置を占めている。ブドリと妹のネリが父母と別れてしまうのも冷害のためであり、赤鬚の男がたびたびオリザの栽培を失敗して財産を失って行くのも、「たびたびの寒さと早魃のために」であることが記されている(249ページ)。

先の干害と合わせ、凶作そして飢饉を引き起こすものは冷害であった。岩手県の冷害の発生状況は、『岩手県農業史』によると、明治以降から昭和六年までのものだけでも明治2(1867)年、35(1902)年、38(1905)年、大正2(1913)年と4回を数えている(岩手県,1979: 828)。

冷害の克服は、「グスコブドリの伝記」を貫く主要なテーマである¹⁸。そして、それは最後の場面に提示される27歳の年の寒い季候を変えるために、カルボナード火山から炭酸瓦斯(たんさんがす)を噴出させるためのブドリの自己犠牲という行為となる。そしてそれは成功し、「この物語のはじまりのやうになる筈の。たくさんブドリのお父さんやお母さんは、たくさんブドリやネリといつしよに、その冬を暖かいたべものと、明るい薪で楽しく暮らすことができたのでした」という完結を迎える(267ページ～271ページ)。

以上のように、この作品では科学技術は生業に従属するものとして描かれている。だから、科学技術者であるブドリは、「森」や「野原」の生業を支援し、生活を安定させるために役立たなければならぬものとして描かれている¹⁹。つまり、賢治は科学技術と生業技術が一体化した「農業」の姿を描こうとしている。それがこの「グスコブドリの伝記」という作品であると考えられる。

(2) 「紫雲英」をめぐる

賢治が考えたことを実現できるのは、農業技術者と農業者の相互理解による。しかた、そのことは困難な路である。この作品でも、ブドリが七、八人の百姓に乱暴される場面がある。雨とともに窒素肥料を降らせることに成功したブドリが、秋になってからタチナ火山へ行った帰り道で、降らした肥料のせいでオリザが倒れてしまったという百姓たちに乱暴される場面である。

「倒れるなんて、きみらは春に出したポスターを見なかつたのか。」とブドリは言う。しかし、百姓たちはそのことばに耳を貸さずブドリをなぐったりふんだりし、ブドリは大けがを負う。(265ページ～266ページ)。

肥料のせいでオリザが倒れてしまうということは、窒素肥料が過剰になったためである。先に一人の老人が「やめろつて云つたらやめるもんだ。そんなに肥料(こやし)うんと入れて、藁はとれるつたつて、実はひとつぶもとれるもんでない。」と諷める場面があることを示しておいたが、この「藁はとれるつたつて」という言葉と似通ったことが「饗宴」と題された賢治の未刊の詩編に描かれている。「紫雲英(はなこ)植えれば米とれるてが／藁ばりとつたて間に合あなじゃ(宮沢,1976: 25)」という一節がそれである。

「饗宴」と題された詩編は、村仕事の土橋作りに出た人たちが、仕事が済んで、地主や賦役に出ない人たちから集

めた酒を酌み交わす「饗宴」を開く。そこでの出来事を記した作品である。酒を飲まない賢治が所在なく「われにもあらず／ほんやり稲の種類を云ふ」という行動をとる。その農業技師めいた言動を揶揄するように誰かがつぶやいた言葉である。このことばは、「紫雲英」が目の敵にされている。先に述べたように「紫雲英」は岩手県農業試験場が緑肥として推進していたものであった。従ってこのつぶやきは、直接的には賢治への批判のことばであるが、同時に農業試験場を先頭として進めている科学的な栽培技術は役に立たないという批判にもなっている。

先に述べたように、「紫雲英(はなこ)植れば米とれるてが／藁ばりとって間に合あなじゃ」というのは窒素肥料の過剰のためであって、レンゲのためではない。肥料を適切に使用しない科学的栽培技術に対する理解不足のためであることはいうまでもない。

ブドリが乱暴されたのも、肥料の入れ様をまちがって教えた農業技師が、オリザの倒れたのをみんな火山局のせいにしたためであったということが後に新聞でわかる(265ページ～266ページ)。

賢治自身が生涯を通し農業技術者として、肥料設計や土壌改良などを指導し、自分の持っている知識を地域の農業に役立てようとしていたことはよく知られている。実際の場面で、賢治はこのような農民の科学的栽培技術への理解不足あるいは誤解ということに直面したことも少なくないと推測できる。そして科学技術と一体となった農業の難しさを体験していたのではないとも推測できる。事実を知ったブドリは一人で笑うだけである。無知な百姓やごまかした農業技師に対しての怒りは描かれていない。農業技術者としての賢治の心に宿った「影」のようなものがこれらには表現されていると考えるのである。

7.まとめ

生業の技術を分析概念として「グスコブドリの伝記」を読んできた。その結果、筆者が見出したものは、山村、農村で木樵り、養蚕、稲作、そして牧畜などによって生きる人々の生業を中心とした生活の姿である。それらの姿は、作者宮沢賢治が生きた時代である明治後半から作品が描かれた昭和初年までの、岩手県の生業を中心とした生活の

姿がほぼ正確に反映されたものであった。「グスコブドリの伝記」は、この作品が描かれた時代に生きている人々の群像としての「生業を中心とした生活の歴史」、「生活誌」となっている。

しかし、現状においてそれは少数の一次産業従事者のものであって、現実的な課題から乖離したものになっているのではないかという疑問も持ち上がる。この作品で描かれた「飢饉」は過去のものであり、現実には起こりえないとも考えられる。

このような考え方に対し、菊池勇夫は平成5(1993)年の冷害に際し、200万トンの米を輸入しなければならなかったことを例に挙げ、「コメの緊急輸入や米価の値上がりという事態は、少なくともコメの備蓄の大切さと、安定的なコメの需給を保障し米価急騰を回避するための食管制度の必要性とを、改めて再認識させるものである」と述べている(菊池,1994: 8)。

また、大島丈志は、「グスコブドリの伝記」の背景となっている当時の冷害による岩手県の農家の疲弊、飢饉は、冷害によって水稲が被害を受けると、その代用となる作物が存在しなかったためであると述べている(大島, 2013: 213-214)。

農林水産省では、不測の事態における食料安定供給を確保することは、国の責務と考え「食料安全保障」ということを打ち出している。それを踏まえ、食料・農業・農村基本法(平成11年法律第106号)の第2条第2項で、「国民に対する食料の安定的な供給については、世界の食料の需給及び貿易が不安定な要素を有していることにかんがみ、国内の農業生産の増大を図ることを基本とし、これと輸入及び備蓄とを適切に組み合わせて行われなければならない」としている²⁰。

しかし、農林水産省によると、食料自給率は、カロリーベースでは近年40%前後で推移して平成26(2014)年は39%となっており、アメリカ127%、フランス129%、ドイツ92%、イギリス72%である先進国と比較すると、最低の水準となっている²¹。このように、国内の農業生産の増大を図ることは現実のものとなっていない。

農業は季節的な生業である。そのため、農業生産品がすぐさま増産できるものではないことは自明である。しかし、東北の農山村漁村が高齢化と少子化により衰退し、結果的に農業人口の減少、休耕地や耕作放棄地の拡大が進行している現状に対して、何らかの対策を講ずる必要性が

ある。

宮澤賢治は、農業技術者として農山村に生きる人の生活から把握した問題とその解決法を文学者として「童話」という形で描いた。「民俗誌」や「生活誌」を扱う学問領域である「民俗学」は、これまでの甚大な民俗資料や生活資料の積み重ねを基にして、このような現状に対してどのようなことを提示できるのかが問われていると考えるのである。

註

1. この童話の初出は、昭和7(1932)年3月10日に東京神田の文教書院が発行した『児童文学』第2冊で、棟方志功が挿絵を描いている(堀尾,1991)。また、主人公に名前である「グスコブドリ」とは、この童話の先行形にあたる「グスコブドリの伝記」で「てぐすこんぶ取り(テグス昆布取り)」からこの人名が生まれ、その変形が「グスコブドリ」となった(原,1989: 200,276)。この人名は姓と名が区別されていないが、作中ではしばしば「ブドリ」と呼ばれ、また父親は「グスコブナドリ」であるので、本稿では一応「グスコブ」が姓で「ブドリ」を名と考えておく。
2. 例えば、中村稔は「『グスコブドリの伝記』がありうべかりし宮沢賢治の伝記であるとは、よく言われることである。ありうるべかりし、とは、もしグスコブドリと同じような境遇におかれたならば、宮沢賢治もおそらくおなじように生きたろうということである」と言っている(中村,1972: 105)。
3. 『宮澤賢治語彙辞典』によると、賢治はイーハトーブの表記を6種類用いているが、その時期的にも不同であり、表記が時間的経過の中で変化したわけではないとしている。6種類の表記は次の通りである。①イーハトヴ、②イーハトブ、③イーハトヴ、④イーハトボ、⑤イーハトヴォ、⑥イエハトブ。なお、この分類では、「グスコブドリの伝記」には「イーハトヴ」という表記が用いられているとしている(原,1989: 58)が、『校本 宮澤賢治全集』第11巻の「校異」によると、発表形では「イーハトーブ」という表記に訂正されている(宮澤,1974: 481)。本稿では特に表記を区別する必要がない場合は、『校本 宮澤賢治全集』や『宮沢賢治全集』(宮沢,1986)の「グスコブドリの伝記」本文に用いられている「イーハトーブ」を用いることにする。
4. 岡恵介は「山村における森林資源の利用史—森は人に鉄や塩、牛と豊かな食糧を与え、飢饉や恐慌、欠配から救った—」という論考の中で、「グスコブドリの伝記」を取り上げ、ブドリの住んでいた森が北上山地にあったと想定して論を進めている(岡,2005: 121-122)。
5. 2016年6月13日に深山地区ではテンサンの卵を飼育樹園に付けた。その時に飼育の指導をしている新野孝一氏に聞いた話である。
6. (岡,2008:120)図13のグラフから読み取った数字である。
7. 賢治の『春と修羅』には「小岩井農場」と題した長編詩が収録されている。
8. 本文の表記通りにすると、「あちこちから集まつてきた人たちとい

つしよに」や「今まで手伝つて貰つた家に働きにでかけました」となるが、作業を整理する過程で示した作業工程のような表記に筆者が変更した。

9. 真壁仁は「その葉に赤い点々がつくという病気は、稲の葉稲熱病(葉いもち病)のことである」と言い切っている(真壁,1985: 19)。実際に稲作をし、また昭和10(1935)年からは米の検査員もした真壁の言であることから信頼性は高いと考える。
10. 真壁仁も同様の指摘をしている(真壁,1985: 19)。
11. 『明治農書全集』第12巻 1984 農山漁村文化協会発行に所収されたものを用いた。
12. 実際の編集は荻戸善政であるとする杉原謙氏の説が定説化している。また、中條の名前も記されているのは、当時奉行であった2名の名前を記すことにより、責任の所在は奉行にあること及び藩の版行であることを内外に示すためであると高垣は考えている(高垣,2009: 18)。
13. この本文は『かてもの』復刻本・読み下し本(タカノ印刷有限会社編 1974)の読み下し本3ページから引用した。
14. この書物については、筆者の大学院の指導教官である東北芸術工科大学の田口洋美教授から御教授いただいた。
15. (大日本副業奨励会,1913: 502-505)
16. 直接火山局が関わっているかどうかは不明であるが、関係しているクーボー大博士の計画である。
17. 本文は、ちくま文庫版『宮澤賢治全集』10巻の52ページから引用した。表記は「ド」であるが、『宮澤賢治全集』の編集者は「ヒドリ」は「ヒデリ」の誤記であろうと推定している。
18. 大島丈志は、「グスコブドリの伝記」は、周期的に発生する冷害と、冷害によって引き起こされる飢饉を経験する農村を基盤として成立していたことを指摘している(大島,2013: 225)。
19. 笠井啓は、この作品で描かれているブドリの生き方を「技術者倫理」として、「自然災害から公衆の安全を守るという、専門職業人としての社会的責任を果たすことは、技術者に課せられた重大な義務であるといえよう」と述べている(笠井,2012: 122)。この笠井の論考のように、この作品の結末についてはさまざまな議論がある。本稿においてはそれに立ち入ることはしないが、別に考えてみたい問題である。
20. 農林水産省:<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/1.html>(2006.7.25)
21. 農林水産省:http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/011.html(2006.7.25)

引用・参考文献

- 青山宏夫 1985 「文学からみた「場所のイメージ」—宮澤賢治『グスコブドリの伝記』を例にして—」『理論地理学ノート』4 37-44
- 浅賀宏一・加藤肇・山田昌雄・吉野嶺一編 2003 『世界におけるいもち病研究の軌跡—21世紀の研究発展をめざして—』日本植物防疫協会
- 井上ひさし 1995 『宮澤賢治に聞く』ネスコ(日本映像出版)
- 岩手県編 1979 『岩手県農業史』岩手県
- 岩手県編 1982 『岩手県林業史』岩手県

上原章次 1964 『原色 家畜図鑑』 保育社
江崎悌三・一色周知・六浦晃・井上寛・間垣弘・緒方正美・黒子浩
1958 『原色 日本蛾類図鑑』下 保育社
大島丈志 2013 『宮沢賢治の農業と文学 苛酷な大地イーハ
トーブの中で』 蒼丘書林
岡恵介 1996 「季節と動植物」野本寛一・福田アジオ編『講座日
本の民俗学』第四巻 環境の民俗 雄山閣 181-194
岡恵介 2005 「山村における森林資源の利用史—森は人に鉄
や塩、牛と豊かな食糧を与え、飢餓や恐慌、欠配から救った—」大
住克博・杉田久志・池田重人編『森の生態史 北上山地の景観と
その成り立ち』古今書院 121-137
岡恵介 2008 『視えざる森のくらし 北上山地・村の民俗生態
史』 大河書房
笠井啓 2012 「宮沢賢治『グスコブドリの伝記』における「技
術者論理」」『福島工業高等専門学校研究紀要』第53号 117-122
河田党編 1975 『作物病虫害事典』 養賢堂
菊池勇夫 1994 『飢饉の社会史』 校倉書房
黒井千次 1977 「ブドリとネネム」『ユリイカ臨時増刊 総特集
宮沢賢治』 34-37
小西正泰校注 1984 『明治農書全集』第12巻 農山漁村文
化協会
桜井尚武 2005 「ミズナラ林の形成—北上山地の母なる森—」
大住克博・杉田久志・池田重人編『森の生態史 北上山地の景観
とその成り立ち』 古今書院 104-120
白杉悦雄 2003 「『民間備荒録』の世界—救荒植物の発見」
『東北学』Vol8 154-165
菅豊 1995 「本当に民俗誌に可能性はあるのか?」『民俗誌』
論・試行と展望』 5-11
大日本副業奨励会編 1913 『日本の副業』 大日本副業奨励会
高垣順子 2009 『改訂 米沢藩の救荒書 『かてもの』をたず
ねる—「かて物」・「か手物」そして「かてもの—』 歴史春秋社
タカノ印刷有限会社編 1974 『かてもの』復刻本・読下し本 タ
カノ印刷
田口洋美 2000 「列島開拓と狩猟のあゆみ」『東北学』Vol3
67-102
内藤正敏 2003 「連載 東北の原風景8 飢餓の宗教・即身
仏」『東北学』Vol8 234-263
中村稔 1972 『宮沢賢治』 筑摩書房
南陽市史編さん委員会編 1987 『南陽市史民俗編—南陽市の
くらしと文化—』 南陽市
新村出編 1955 『広辞苑』 岩波書店
日本工芸会近畿支部編 2001 『工芸の博物誌—手わざを支える
人との』 淡交社
原子朗編著 1989 『宮沢賢治語彙辞典』 東京書籍
藤原俊六郎・安西哲郎・小川吉雄・加藤哲郎 1998 『新版 土
壌肥料用語事典』 農山漁村文化協会
古島敏雄 1975 『古島敏雄著作集』第6巻日本農業技術史
東京大学出版会
堀尾青史編 1991 『宮沢賢治年譜』 筑摩書房
真壁仁 1985 『修羅の渚—宮沢賢治拾遺—』 秋田書房
宮沢賢治 1974 『校本 宮沢賢治全集』第11巻 筑摩書房

宮澤賢治 1976 『校本 宮澤賢治全集』第4巻 筑摩書房
宮沢賢治 1986 『宮沢賢治全集』8 筑摩書房
宮沢賢治 1986 『宮沢賢治全集』2 筑摩書房
吉永秀一郎 2005 「北上山地の地形—歴史時代の遺産—」大
住克博・杉田久志・池田重人編『森の生態史 北上山地の景観と
その成り立ち』 古今書院 2-19
和歌森太郎編 1976 『日本民俗学講座』第1巻 朝倉書店